～医療生協健文会の職員のみなさま～

メロス通信 不定期便

Vol.27
2025年1月号
発行 地域福祉室

『メロスふれんどの会』活動報告

12月21日、メロスふれんどの会では13人が集まり「学びの会と小さなクリスマス会」を開催しました。野田先生を講師に『15歳からの社会保障』の朗読会をしました。職場のパワハラでうつになり失業、住まいも失った主人公の青年が支援団体と出会い生活保護で暮らしを立て直していく物語に、全員が真剣に聞き入りました。

「これは誰にでも起こりうることだ」「携帯電話がないと就職活動も出来ない」「私には相談できる人がいます。だからここにいます」といった感想や「親の介護のため仕事を辞めざるを得なかった」「病気が原因で失業してしまった」など体験談を語られました。

病気や介護、失業などの生活の困りごとに対応するために社会保障制度があります。しかし、知らなければ利用できないし、制度が後退していても気づくことも出来ません。制度を利用し、充実させていくためには「まなぶ」ことと「つながる」ことが大事だと感じました。

今年からは2カ月に1回のペースで「学びとランチのおしゃべり会」を開催する予定です。これからもメロスふれんどのみなさんと一緒に「まなび」を深め「つながり」を広げていきたいと思います。

則貞市営住宅で健康相談会を職員・組合員共同で成功させることができました！

昨年の12月19日に宇部協立病院は今期第二弾の健康チェック・健康相談を組合員、多職種・多事業所の共同で開催しました。今回は組合員によるカフェも同時におこなわれました。

来訪者は12名。健康チェックだけでなく医師による健康相談もあり大変好評でした。

特に新しい試みのカフェは組合員同士のつながりを深めていました。「絶対にこの企画は成功させる」と意気込んできた組合活動の運営員さんからは「ずっと気がかりだった方に会えて本当に良かった」と笑みがこぼれていました。

連載第１回「　まち医者余聞　」　　野田浩夫

＜健康相談のコツ　１＞

宇部や山口の市営住宅の集会所など住民のふれあいの場を借りて、「健康チェックX健康相談会」を連続的に開いている。私としてはこれを医師が病院から出ていって、医師と住民の間にある垣根を壊して低くしようとする画期的な試みだと考えて参加している。

そう言っても、実は健康相談の方法自体が、まだ定式のない、試行錯誤の段階の域にある。誰も教えてくれないことの一つである。

経験から言うと、一番ダメなのは健康チェックの結果を前にまるで病院の外来のように解説・判定する方式だろう。つぎにダメなのは、「健康についての不安はありますか」と聞いて、定型的な問題に常識的なアドバイスを即座にやってしまうことである。これでは従来の医師―患者関係を再生産しているだけになってしまう。

というわけで、最近の結論としては、「健康相談」から「健康雑談」、いや、「健康」も取り払って世間話に浸り切ることを目標にしている。
一言で言えば「脱・健康相談」である。先日は85歳までは自転車での移動を維持したいという人に出会ってエールを送った。
「脱・健康相談」の効果は大きく、地域の健康や生活がどんな人にどのように支えられて来たかを初めて知ることが多いし、本当に急を要する病気が何気なしに来た人の中から発見されることがしばしばある。

こんなことを書いていると、それは大ベテランになって初めてできることで、気軽に健康相談に出ていく気がしなくなると言われそうである。

そこで、「脱・健康相談」である健康相談の組み立て方をこれから少し公開してみたい。